

タイトル 剣岳を味わう贅沢（1）

2009年『剣岳（つるぎだけ） 点の記』新田次郎原作 こんな映画をよく創ったものだ、と、自己的には満足しながら、時代社会を考えるとニーズがあったのか疑問だった。そもそも新田次郎は（失礼だが）あまり面白くない（笑）

これは戦前の日本山岳測量の物語、ただの地図づくりではなく、陸軍指導による戦略的意義があった。もっとも映画はおだやかに、かつ自然の猛威を描きながら新田次郎路線をゆく。とても地味だ。観客席には中高年夫婦が多かった。きっとみんな昔は山好きな若者だったのだろう。剣岳に登った記憶のあるひとたちかな？ と思った。

一緒に観にいったうちのかみさんは、富山人なので、映画に溢れる懐かしい富山弁満載にご満悦。とりわけ、端役の強力（ごうりき）らの富山弁には驚嘆、きっと本物だったのじゃないかと話した。

富山人は立山が誇りである、静岡人にとっての富士とはまたちょっと違う、独占欲の強い誇りである。剣岳は中でもとりわけ屹立している。標高としては、連山の北端、雄山（おやま）のほうが10mほど高いのだが、とにかく、立山といえば、剣岳である。

富山湾の対岸、雨晴（あまば）らし海岸などに出ると、富山湾の白波の上に蜃気楼のように屹立する剣三山（つるぎさんざん：奥剣、剣、前剣）は、空中庭園のようで壮観だ。

万葉の昔（奈良朝時代）、大伴家持（おおとものやかもち）が奈良朝廷の国守として派遣された辺境の終点が富山（越中）ここだった。

夏も雪が消えぬ壮大な美しさに家持はこころ撃たれ、いくつもの立山の歌を詠んだ。辺境での孤独もあったろうが、水遊びをする童（少女）たちの声が、里にこだまする、というような明るい詩が、彼のこころの支えになったことだろう。

家持も使っているように立山は太刀山（たちやま）とも呼ばれたようだが、いずれにしてもその「立山」という名の山はない。立山は関東とを隔てる屏風のような連山の総称なのだ。

不思議な縁で、学生時代の最後の春に出会ったかみさんは、中学時代、学校の体力強靱者選抜で、うちの診療所のあった「地獄谷」から日帰り「剣岳」の登頂を果たしている。これは体力に自信のある大人でもきつかったから大した富山人である。

僕は青春の一ページでしかないが、大学の後半4年間、毎夏2週間をこの山の懷に居住し、先輩後輩のなかで医学に一步一步近づけたことを誇りにおもう。

その山岳診療所は、硫黄噴煙が立ち上る谷のはずれにあり、向かいには大きな「房次荘」というヒュッテもあったから、長い間無事だったのだがこの15年くらいで硫黄噴出量が増え、谷そのものが入所禁止になってしまった。すごく残念だ。前回書いた、天然風呂と星のコラボはもう夢になってしまった。卒業後しばらくOB面をして酒を運んでやるのが楽しみだったのに・・・

前置きが長くなってしまったので、山岳診療所がどんなところだったのか？ これから数回にわけて書いてみたいと思います。じらせてすみません・

2019年1月 本年もよろしく申し上げます。

つ・づ・く